

栄光、真理、そして恵み

「イエスにあつて体験できる三つのもの」
(ヨハネ一・一四〜一八)

NHKの「妄想ニホン料理」というテレビ番組をご存じの方はどれくらいあるだろうか。日本料理などおおよそ見たこともないだろう外国人シェフの所に行き、ある日本料理の特徴をごく簡単に説明する。そしてその情報をもとに想像(妄想?)を膨らませてその日本料理(?)をその国で再現させてみるという番組だ。当然(?)似ても似つかぬものが出て来る。アンマン(ヨルダン)のシェフに「あんまん」を作らせたなら出てきたのは御当地スィーツのクナーファだったりといったギャップが面白い。最後にタネあかし宜しく実物が出て来るが、その時のシェフたちの顔も良い。正に「百聞は一見に如かず」である。

一、神の栄光

一四節の「住まわれた」という言葉には「幕屋(テント)に住む」という意味合いがある。実際にイエスは取られた「肉体」を地上での「幕屋」としてこの世に滞在したのだから、それは全く適切な表現であると言えるし、肉体を幕屋に見立てる表現はパウロも用いている(二コリント五・一)。またこの比喩的表現から考えるとき「私たちはこの方の栄光を見た」は実に味わい深いものとなる。出エジプトの後、イスラエルの民は神の命に従い会見の幕屋を作ったのだが、そこには主の栄光が留まっていた。(出エジ四〇・三五)同じようにイエスが肉体を取つてこの地上に留まったということは、そこに神の栄光があるということになる。だからこのイエスに触れ、彼に出会う時、人間はこの世の虚栄とは一線を画した気高く美しい真の栄光を見ることが出来るのである。

二、神の真理

一四節の最後にはみ子イエスの内に満ちていたものが二つ挙げられる。その一つが「まこと」である。ここでは恐らくはもう一つの表現である「恵み」と呼応させるために「まこと」と和語で訳されているが、他の個所では一般に「真理」と訳される

「アレセア」ということばである。イエスの内には真理が満ちているのだ。だがこれは決して歴史上の人物となられたイエスと彼の内側にある「真理」を分けることが出来ることを意味しない。むしろイエスご自身が「私は道であり、真理であり、いのちである(一四・六)」と言っているように、イエスは真理そのものであるから、歴史の中に突入し、三十年以上の生涯を生きた彼に触れるとき、私たちはイミテーションではない、本物の真理を味わうことが出来るのである。

三、神の恵み

イエスに出会うものはまた「恵み」を受けることが出来る。ここで興味深いのは一六節の「恵みの上にさらに恵みを」という表現だ。この解釈は非常に多様なのだが、やはり直近の一七節との関係で理解するのが良い。モーセによつて与えられた律法はそもそも神の恵みと深く関係するものであり、人々をいのちへ導くよきものであるが、他方においては人類にとつての「フアイナル・アンサー」ではなく、あくまでイエスと言うメシアを待望するものである。逆に言えばイエスこそが律法のためのあり終点なのだ(参・ローマ一〇・四)。だから、イエスが肉体をとつてこの地上に現れたということは律法が照らし出して

た救いの道の完成を意味する。これこそが「恵みの上に恵みを」の意味である。この世にあるあらゆる救済への渇きと正義を求める叫びはこの世に来られた神のみ子、イエス・キリストの恵みによつて全て解決するのだ。

* * *

成功に次ぐ成功の末に彼が降り立ったのは月面だった。不惑の年にNASAを去り、次なる活躍の場所を求めた彼。幸い元宇宙飛行士の肩書は大いに役立ち経済的にも成功した。しかし夫婦は危機を迎えていた。しかしある時から仕事に没頭する彼に不満を抱いていた妻が変わった。相変わらず家庭を顧みない彼を彼女は優しく受け入れるようになった。「祈りが答えられた」とも言う。不思議に思った彼は妻と共に教会の門をたたき、聖書を読んだ。そしてヨハネ一・一四にたどり着いた時彼もまたイエスに触られた。その時から彼は熱心なクリスチャンとなった。家庭は明るくなり、夫婦の危機は過去のものとなった。真理であるイエスが彼と彼女を変えたのだ。彼の名はチャールズ・デューク、史上最年少の月面着陸者だ。友よ、イエスの救いは抽象的概念では決してない。それは見、触れ、感じる事が出来る栄光、真理、めぐみそのものである。